(220)　印度學佛教學研究第 55 巻第 2 号　平成 19 年 3 月

荷車と小屋住まい：ŚB *śālám as*

後　藤　敏　文

1.　*śālám* の語は，事実上，Śatapathabrāhmaṇa (ŚB) に 2 度現れるのみである.[1] *śā́lā-*「小屋，建物」(AV+) からの派生名詞として「小屋に属するもの／こと」の意味が推定される (cf. PW s.v. "in der Hütte u.s.w. befindlich")．外見から区別はつかないが，Vr̥ddhi 派生による *-á-* 語幹中性名詞（単数集合名詞）と考えられる．両箇所ともに *ánas-*「荷車」との対比が見られ，VI 8,1,1 においては，*cakrám car* が「車によって移動生活をする」を意味するのに対し，*śālám as* は「小屋住まいをする」，すなわち，定住生活をする意味と解される (PW s.v. "so v[iel] a[ls] sassen zu Hause")．I 1,2,5 は，そのような移動生活が本来の姿で，定住生活は後の風習であることを言い，祭式が往古の生活を模倣する構造をもつことを明確に示す箇所として重要である．

2.　ŚB VI 8,1,1: *vanīvāhyétāgním bíbhrad íty āhuh.* | *devā́ś cā́surā́ś cobháye prājāpatyā́ aspardhanta.* ***té devā́ś cakrám ácarañ chālám ásurā āsaṃs.*** *té devā́ś cakréṇa cáranta etát kármāpaśyaṃś. cakréṇa hí vái devā́ś cáranta etát kármā́paśyaṃs. tásmād ánasa evá pauroḍāśéṣu yájūṃṣy ánaso 'gnáu* ||「祭火を保持しながら，[荷車に] 運ばせて往復すべきである[2]」と［人々は］言っている．ともにプラジャーパティの子孫である神々とアスラたちとは競い合っていた．その際神々は車を (Akk.) 移動していた (→ 3.)，アスラたちは小屋住まいをしていた．彼ら神々は車によって (Instr.) 移動している時に，この行作を観得した．車によって神々が移動している時に，この行作を観得したのだから，それ故，プローダーシャ（供物用パンケーキ）に関わる［諸祭式］の場合には，yajuṣ (Adhvaryu 祭官の唱える祭詞) たちは荷車に属する，Agni[cayana] の場合には荷車に属する．

「yajuṣ たちが荷車に属する」というのは「移動生活時（または期）のものである，小屋住まい（定住生活）に属さない」を謂うものと解される．

3.　***cakráṃ car*** は，直後に *cakréṇa cárantaḥ*「車によって (Instr.) 移動していると」

と言い換えられていることからも，「車輪」（具体的には *rátha-*「戦車」，*ánas-*「荷車」など）によって移動生活をすることを謂う表現と解される．*car* の意味が「移動する」（行為の自動詞）であれば，Akk. と解される中性名詞 *cakrám* の機能は動詞 *car* の意味内容を具体化・限定して表示する Inhaltsakkusativ（der innere Akk.）[3] と解される．GAEDICKE Der Accusativ im Veda（1880）162 は *car*「動く，移動する，動き回る，従事する」の Inhaltsakk. を用いた表現として *vartaním*「一巡する」[4]，*mantraśrútyam*「助言に耳を傾けるよう努める」，*vrátam*「斎戒を行う」，*prapaṇám*「取引をする」，*vásnam*「値切りをする」，同族目的語による *brahmacáryam*「ヴェーダ学生の生活をする」などを挙げる．[5]

ところが，*cakrám ácaran*（Ipf. 3.Pl., antithetischer Akzent）の場合には，*car* という行為の具体的内容あるいは結果[6] が「車輪」であるという関係ではない．それにも拘わらず Akk. が可能なのは，*brahmacárya-* の場合に見られるように，動詞 *car* と *cakrá-* との同族関係に基礎があるためと推定される．さらに，*car* の「活動する，…に携わる，…を取り扱う」意味（→ 注 5）はこの構文の保持を側面から支えたであろう．即ち，*cakrá-*「車，車輪」は，ギリシャ語 *kúklos* をはじめ諸言語に確認される印欧祖語 **kʷé-kʷl-o-* に遡る，動詞語根 **kʷel*[7] からの派生名詞（*「回転し続けるもの」）である（MAYRHOFER Etym.Wb.d.Aia. s.v. [1990] 参照）．インドアーリヤ語ではもはや語源的繋がりを感じさせない程語形に隔たりがあることを考慮すると，古い時代の表現が残存していた可能性も考えられる．直後に Instr. *cakréṇa* による「語釈」が必要とされたこともこれを支持しよう．[8] この仮定が正しいとすれば，表現自体が後まで生き残る例として興味深い．[9]

4. ***śālám as***（*āsan* Ipf. 3. Pl.）には「小屋住まいをする，定住生活をする」意味が想定される．構文上は HOFFMANN “Ved. *idáṃ bhū*”（Aufsätze zur Indoiranistik II, 1976, 557–559）が見出した *idáṃ bhū/as* 構文から説明できる：‘diese [Herrschaft] hier erlangen/werden/innehaben’（より一般的に該当する定式は *idám as/bhū* ‘für etw. zuständig sein/werden; über etw. herrschen, etw. innehaben [± werden]’「... を管轄・支配している [*as*] ／するようになる [*bhū*]」：T. GOTŌ Gs.Schindler, 1999, 137, Akkusativ [→ 注 3] 31）．この構文は確実にインドイラン共通時代に遡る：*rāṣṭrám bhū*「支配権に至る」YS^p +, *kṣatrám bhū* Br. ～ jav. *xšaθrəm bū*.[10] HOFFMANN の指摘以降多くの用例が見つかっているが，殆ど全て n. Sg. 形を用い，法律，社会制度関係の表現に多い：*idám*（± [*kṣatrám*], *sárvam, sárvam jágat*, etc.），sárvam（± *etát*），*viśvaiśvaryam, arāṣṭrám, kilbiṣam, mitrám*[11]，*sat-*

yám, ánr̥tam, r̥ṇám[12], *sat, apā̆mítyam, vratám, sad(-)vivācanam, priyám, priyáṃ dhā̆ma, śunám, yáśas, bháiṣajyam, bráhma, indrabhajanám, jyotiṣ, rūpám, sárvam ánnam, svamr̥tam draviṇam savarcasam* など．これまで得られた用例はAV，特にYS^p 以降に多いが，[13] 解釈上の問題が絡み，インドイラン祖語に遡る同構文はRVにも当然相当数見出される筈である[14].

用例が事実上中性名詞との結合に限られるため，“*idám*”の部分にはNom./Akk.両方の可能性が考えられる．HOFFMANNは先行研究に触れた後，Nom.と断定するが，根拠は，構文中に並存する動詞*as*はprädikativer Nom.をとる，という前提に他ならない: *ayáṃ rāṣṭráṁ syāt*「この者が支配権を持って欲しい」(*syāt*は*bhū*のOpt.を補完する) MS III 3,7^p: 40,7; *yamó vā́ idám abhūd yád vayáṁ smáḥ*「我々が［今］もっているこの［地上の支配権］をYamaがもっていた」[15] TS II 1,4,4^p，及び*as*が省略された*āvám idám bhaviṣyāvo yád ādityā́ḥ*「Āditya神たちが［今］もっているこの［支配権］を我々両者がもつことになろう」MS I 6,12^p:104,16．しかし，*as*にもprädikatives Adv.や関与のAkk.の可能性は排除できない．さらに，**3.** に見たn. Sg. Akk.による*cakráṃ car*の構文は，*śālám as*がInhaltsakk.による表現である可能性を示唆する．GAEDICKE Acc.165f.はRV I 109,7（→ 注14）の例をInhaltsakk.の項目に収めており，この構文の可能性そのものを*as*にも想定していたことになる．HOFFMANN, GAEDICKE（153f. *bhū* + Nom., 165f. *as* + Akk.）が解明に至らなかった理由は*as*と*bhū*とを一体のものとして捉える観点を欠いていたことにある．

ここでは，*as*「ある」によって示される主語の具体的あり方を，Akk. *śālám*「小屋住まい，家を建てての定住（期）」が限定する構造と説明できる．*idám as/bhū*構文成立事情の解明には，用例を（インド・ヨーロッパ諸語に亘って）収集し，各用例の履歴を多層多角的に検証して，構文成立時の原理と歴史的展開とを確認することが求められるが，用例の大多数は直接*as/bhū*のInhaltsakk.構文として説明できる見込みがある: *rāṣṭrám as*「その存在が支配権によって特色づけられるような状態である（*bhū*：になる)，*r̥ṇám as*「… 負債を負った状態である（／になる)．[16] この仮説に従えば，Inhaltsakk.によって限定を受ける動詞*as/bhū*は本動詞「がある」，「が生じる」であり，「である」，「になる」ではない．従って，“*idám as/bhū*”構文に「動詞が主語ではなく述語名詞の数に一致する」現象が見られないこと[17] もInhaltsakk.構文からの説明を支持する．

5.　*śālám*の残る一例は，祭式が移動生活期に原型をもつことを言う典拠として

重要である（新月祭・満月祭の献供用 puroḍāśa（パンケーキ）の材料を Gārhapatya 祭火の西側に置かれた荷車に取りに行く場面）：[18]　ŚB I 1,2,5 *sá vā́ ánasa evá gr̥hṇīyāt. áno ha vā́ ágre. páśc̀eva vā́ idám yác chālám.*[19] *sá yád evā́gre tát karavāṇīti. tásmād ánasa evá gr̥hṇīyāt.* その際，他ならぬ荷車から［材料の穀物を］取るべきなのだ．荷車が，つまり，初めに［あった］のだ．小屋住まいならば，これはまさしく後から［ある］のだ．そこで，初めに［あった］こと，それを私は為そうと［考えてのことである］．それ故，他ならぬ荷車から取るべきである．

1）他に，樹木名 *śāla-* (m.)「シャラノキ，沙羅双樹」が Ep. Kl. に現れる．

2）*vanīvāhyéta*: *vah*「運ぶ」の Intens. Opt., 語根部分の *ā* は Kaus. に属することを示す．Agnicayana（煉瓦火壇構築祭）の潔斎（dīkṣā）の終わりに，火鉢に入れた火を荷車に載せ，祭主が牽いて祭場からある地点まで行き，戻ってくる行作を指す．移動生活を擬えたものと解される．Cf. HILLEBRANDT Rit.Lit. 163, STAAL Agni II 98, SCHAEFER Das Intensivum (1994) 55, 179.

3）GOTŌ "Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums"（Indogermanische Syntax －Fragen und Perspektiven－, 2002, 21–42）32–35 参照．

4）*vartaní-* は通常「轍」を意味するが，この構文では動詞の原義に近い意味を示す．Inhaltsakk. はこの場合結果の Akk. に近い．GOTŌ Akk.（→ 前注）34 参照．

5）印欧祖語 *k^wel* に既に「携わる，従事する」という用法が想定され（GOTŌ I. Präs. 135 n.172 参照），Inhaltsakk. と Objektsakk. との境界は常に分明ではない．

6）*dhárman car*「正しい行いをする」（Pass. *dharmo caryatām* KauśSū）を GAEDICKE は既に目的語となっているものと判断する．

7）Lexikon der indogermanischen Verben（RIX, KÜMMEL et al., ²2001）386ff.（LIPP 担当）は seṭ 語根 *k^welh₁ "eine Drehung machen, sich umdrehen, sich (um-, zu-)wenden"（転回する，向きを変える，向きなおる）」を設定．*cakrá-* のアクセントは Kollektiv *k^wek^{w}léh₂ によるとされるが，古インドアーリヤ語の同形成法では一般にこの位置にある．

8）同じく同族目的語による Pāli *cārikaṃ car*「遊行する，遍歴移動生活を行う」の場合には無論語釈（Glosse）の必要はない．

9）*vartaní-* の例（→ 注 4）のように，*cakrá-* の場合にも「車輪」ではなく，原義に近い「回転，移動し続ける」(?) が意図されていた可能性も排除できない．この場合にも，表現自体が古い時代に成立したことを示唆する．

10）印欧祖語に遡る可能性もある，cf. 現代独語 *ich bin schuld*「私に責任／罪がある」とその古形（cf. BEHAGEL I 6, KLUGE/SEEBOLD s.v. *Schuld*, H. PAUL Prinzipien ⁵357: §250．例えば，*ich bin Jahrgang 1948*「私は 1948 年生まれである」（軍隊用語から？）など官用表現に多い事項の提示だけに重点を置く構文（時間的，空間的幅と限定を持つ Lok. や前置詞表現に対比される）との近さが想起される．Akk. の中核にそもそもこのような "Gesamtheit"（全体観）が想定されることについては GOTŌ Akk. 41f.. ―確実に印欧祖語

に遡る *nā́ma* の構文（“Acc. graecus”，GAEDICKE は Objektsakk. から説明）は，この関連において改めて検証を要するかもしれない．最新の研究 H. MIYAKAWA Travaux du Cercle linguistique de Waseda 8 (2004) 16–42 を参照されたい．

11）　西村直子『放牧と敷き草刈り』(2006) 156 n. 414.

12）　同 144 n. 401 及び指示箇所を参照.

13）　アクセント付の語は，AV, YS^{m}, YS^{p}, ŚB, TB に用例があることを示す．— n. Pl. も見出される：*etā́ni sárvāni* [*rājyā́ni*] *bhavati* MS I 8,6^{p}:124,14, *etā́ni sárvāni bhavati* ChU V 1,15 (GOTŌ Gs.Schindler 138); 可能性としては Y 9,15（JAv.）*abauuat̰ maⁱniuuā̊ dāmąn*（GOTŌ Orient 39, 2004, 132）.［Kl.: Buddhacarita I 67, Bodhicaryāvatāra III 7.］

14）　例えば，Puruṣasūkta X 90,2 *púruṣa evédaṃ sárvam*「プルシャこそがこの一切を支配していた」(?)，I 109,7 *yébhiḥ sapitvám pitáro na ā́san*「我々の父祖たちがそれらと共食する権利を有していた［その同じ太陽光線たち］」(→ 本文下).

15）　HOFFMANN は “Yama ist diese (Herrschaft) geworden, welche wir sind, d.h. Yama hat die Herrschaft in dieser Welt erlangt, die wir innehaben” と解釈しているが，*abhūt* は *as* の Aor.（確認［Konstatierung］）を補完し，「であった，もっていた」（過去の［継続する］状態）を意味する：GOTŌ Gs.Schindler 131 n.17.

16）　外見が同じでも，単語，概念によっては Nom. が自然に思われる用例もある．*pramāṇám as*「(誰々が) 基準である」(誰々の判断が正しい決定である)：*yudhiṣṭhiras tu praśne asmin pramāṇam iti me matiḥ*「しかし，この問いについては，Y が判断基準（権威）であるというのが私の考えである」MBhār II 62,21, さらに I 77,18, XII 111,10（赤松明彦氏の教示による）．— *idám as/bhū* の他動詞（faktitiv-facientiv）として，*kar/kr̥* による構文の可能性をも考慮する必要がある：人の Akk. ＋ *ā́gāṃsi kar* RV (GOTŌ Akk. 31), *yaśas tvā +patnyāṃ*(?) *kr̥ṇmaḥ*「我々は君に名声を作る（君が名声を支配するようにする）」PS IV 10,3, *mayo-bhū́/bhú-*「喜びとなる／を司る」（堂山『リグヴェーダにおける1人称接続法の研究』，2005, 284 n. 555）:: *máyas kar/kr̥*「(生き返るような) 喜びを為す」RV +.

17）　GOTŌ Gs.Schindler (Compositiones Indogermanicae, Praha 1999) 137.

18）　西村直子『放牧と敷き草刈り』286 参照.

19）～ŚBK II 1,2,7 *áno vā́ idám ágre. paścā́ vā́* (v.l. *paścā́d vā́*) *idáṃ yác chā́lā*「荷車がここに初めに［あった］のだ．小屋ならば，これは後からなのだ」.

（日本学術振興会平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究 c による研究成果の一部）
〈キーワード〉　ヴェーダ，Śatapatha-Brāhmaṇa，*śālā́-*，*cakrám car*，シンタクス，*idám bhū* 構文，Inhaltsakkusativ，移動生活，定住

（東北大学大学院文学研究科教授，Dr.phil.）

148. Cart and Hut: *śālám as* 'to live in the hut' in the Śatapathabrāhmaṇa

GOTŌ Toshifumi

śālá- (n.) 'living in a hut', a derivative from *śālā-* 'hut, house, hall' (AV+) occurs only twice in the Śatapathabrāhmaṇa in a usage opposed to *Enas-* 'cart' which represents the nomadic way of life. *śālám as* 'to be in the hut' and *cakrám̐ car* 'to travel with the wheel' are the expressions for 'to live sedentary' and 'to follow the nomadic life in carts and chariots', respectively (VI 8,1,1). The other occurrence reports that the nomadic lifestyle reflects the custom in former days which people imitate in the ritual, and the settled one the later (I 1,2,5).

The peculiar expressions *cakrám̐ car* and *śālám as* are important also from the linguistic viewpoint. K. HOFFMANN pointed out the construction *idám bhū/as* 'to become/be ruling, controlling over something' (*Aufsätze* II 557–559). The noun appearing with *bhū* and *as* (almost always in n. sg.) is a nominative according to him. But *śālám as* points to another solution.

cakrám̐ car is obviously an expression with an Inhaltsakkusativ (an inner acc., in this case a cognate one), going back to the earlier period when the etymological relation of *cakrá-* 'wheel' (PIE. **kʷé-kʷl-o-*) to the root *car* 'to roll, move' (< **kʷel*) was still alive. In the Brāhmaṇa a sentence with instrumental *cakréṇa* 'by the wheel' was necessarily added. This phrase *cakrám̐ car* points to the possibility to interpret also *śálam as* as a construction of *as* 'to be' with an Inhaltsakk. The *idám as/bhū* construction could be, in general, explained as such. Also the fact that there is no example found for the verb's accord with predicative noun in number in this constrution (Gotō, *Gs. Schindler* 137) supports this interpretation, for the verb is then a full verb 'to be, to exist' or 'to appear'.

Abstracts, III p. (235)-(236) = 1263-1264